

講演Ⅰ

審美補綴に必要な天然歯形態と基本三形態の類似性

大阪セラミックストレーニングセンター 代表 片岡 繁夫



審美補綴を完成に導く要因として、歯牙形態がもっとも大切と考える。

健康的で、美しい顔貌を含めた口腔の回復は、歯牙排列の位置関係

(Positioning)であり、個々の天然歯のもつ歯牙形態(Morphology)、及び 表面性状(Surface, Characterization)を再現することである。

以上は、表面的に見える美しさを司る要因であるが、歯周組織の健康を取りもどし、かつ維持することも、審美補綴では欠かすことのできない事である。それらもまた天然歯牙の形態を再現することに有ると考える。

よって、天然歯形態には、補綴物に必要な全ての事柄が兼ね備えられている。

天然歯形態を様々な角度から観察し、美しい顔貌、及び健康的な歯周組織の美しさを創る為の補綴物がどのような形態であるかを考察する。

更に、天然歯はある法則に則り、基本三形態に分類する事が出来、それらの形態(円形、尖形、方形)は類似性を持つ事を解説する。

講演Ⅱ

歯肉色ポーセレンを使用したインプラント補綴における審美回復とその実際

Jungo Endo / Jungo Endo Dental Studio / Oral Design Hermosa Beach 遠藤 淳吾



〔講演内容〕 現在、患者の審美に対する要求は非常に高く、より自然感のある補綴物が求められていると考える。それらの高い審美的要求は、残念ながら多くの歯周組織を失ってしまった無歯顎患者のインプラント治療においても例外ではない。機能性および審美的な理由から歯肉色ポーセレンを使用するインプラントの症例が増えてきているが、それらは決して簡単なものではなく、実際に多くの失敗例も目にする。

今回、歯肉色ポーセレンを使用したインプラント補綴における演者の考える審美的アプローチ、またそれらを成功に導くためのコミュニケーションの重要性、適正なシェードテイクの方法、また歯肉色ポーセレンを使用するうえでの注意点とその築盛方法の実際について、どこまで自然感のある補綴物が再現できるのか、無歯顎のインプラント症例だけでなくより難易度の高い部分欠損の歯肉色ポーセレンを使用した臨床例を通して、メタルセラミックスだけでなくジル コニアでの症例も交え紹介したいと思う。

また今現在、世界中において歯科業界全体が大きな変革の時期に差し掛かっていると感じます。それらは言うまでもなくSNSやインターネットの普及によるグローバル化、また歯科のデジタル化が一番の理由に挙げられるのではないかと思います。また世界中多くの歯科医師や歯科技工士が今までには無いビジネススタイルや、国境を飛び越えグローバルなチームワーク歯科治療を行なっています。

これら時代の変化に我々日本人歯科技工士はどう対応して行くべきなのか？自分の海外生活の中で経験した日本とアメリカまた海外での歯科事情や文化の違い、また自分が講演活動などで訪れた世界各国(ヨーロッパや南米)で自分自身が見て感じた、これから求められる歯科技工士像とは一体どういったものなのか？

それらを今の日本が抱える問題点と照らし合わせ、皆さんと一緒に考えていけたらと思います。

講演Ⅲ

長期的に機能するパーシャルデンチャーの要件

合同会社レーヴデンタルクラフト 尾形清敏（山形県歯科技工士会会員）



予防歯科が進んでいる現在では 1989 年に提唱された 8020 運動も達成率は5割を超え半分以上の患者が80歳で20本以上の歯を保っている。したがって総義歯は減少しているがパーシャルデンチャーにおいては多種多様に増加していると言える。難症例と言われるEichner の分類 B4、C1 などの患者も増加して見られるようになったように感じる。様々な欠損歯列に対しどのように対応していくかが重要になってきている。

そして欠損歯列への対応というとブリッジ・パーシャルデンチャー・インプラントが挙げられる。欠損補綴の第一選択肢はデンチャーではなく、インプラントによる治療が選択されると思われる。しかし、費用の問題や患者の心理的抵抗、骨の状態によりパーシャルデンチャーが選択されることも少なくない。

パーシャルデンチャーの利点を理解し、欠損補綴の目的に沿った補綴物の製作をしなければならない。

今回は義歯補綴物の製作において様々な欠損状態、そしてインプラントの有無、口腔内の条件が複雑に絡んだ状態に対して、力学的な考察をもとに長期予後为目的とした補綴治療症例を供覧したい。